



1991年5月カンヌ国際映画祭。正式参加作品の上映が始まると、フランス国内の新聞の映画欄は連日、前日上映作品の批評でにぎわっていた。新人監督作の中でも、とりわけ話題に上ったのが本作「つめたく冷えた月」だった。それらの多くは、批評というよりこの問題作に対する驚愕の声であった。いわゆる“屍姦”というタブーをこれほどあからさまに描いた映画は過去に存在しなかったからである。

二人のどうしようもない中年男達の、救いようのない日常の言動を中心に展開される本作は、アメリカの異色作家チャールズ・ブコフスキーの2編の短編を元に製作された。監督・脚本・主演の3役をこなしたパトリック・ブシテーは、70年代より映画、テレビで活躍してきた中堅の俳優である。非常に天賦の才能があり、猛烈に独立心旺盛で、分類不可能な人物として評価されてきた彼の、あらゆる才能を凝縮したのが本作であると言えよう。

「つめたく冷えた月」の出発点は、ブシテーがブコフスキーの世界に夢中になった時に始まった。中でもひとつの短編人魚との交尾 (Copulating mermaid of Venice) が彼のインスピレーションを異常に駆り立て、ついに映画化権を手に入れるに至った。(この短編小説は、すでにベルギーの監督ドミニック・ドゥルドゥルの「クレイジー・ラブ 魅せられたる三夜」の3番目のエピソードに翻案されている) 役者を続ける一方で、短編の監督も始めていたブシテーは、まず26分の短編を製作し、1990年のセザール賞の短編劇映画賞を獲得する。その短編映画が奇オリュック・ベッソンの目に止まった。ベッソンから長編映画に作り直さないか、との提案があり、ブシテーはふたつ返事で引き受けた。ブシテーは登場人物の特徴をよりはっきりとしたものにするために、ブコフスキーのもうひとつの短編“充電のあいまいに (Trouble with the battery)”の版權も買い取った。結果としてベッソンと、ブシテーが1984年に設立した製作会社の共同経営者アンドレ・マルティネスが製作を担当、ブシテーとジャッキー・ペロエールが共同で脚本を書いた。カメラマンのジャン＝ジャック・ブオンがモノクロで撮影し、ディディエール・ロックウッドの音楽と、ジミ・ヘンドリックス、プロコル・ハルム、キンクスの歌にあわせて展開される「つめたく冷えた月」は、ブコフスキーの特有の雰囲気をも再現することに成功している。

キャストに、主演のクレイジーな中年男達を、ブシテーと存在感のある演技でヨーロッパの監督に人気のジャン＝フランソワ・ステヴナンが息のあった演技で熱演し、倦怠期の妹夫婦を、ジャン＝ピエール・ビッソンとローラ・ファヴァリが演じている。また、哀れな美しい人魚 (死体) は、本作がデビューのカリン・ナリス。